様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ５ 月 １５ 日現在

機関番号：１１３０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2014～2016
課題番号：２６３７０３５１

研究課題名（和文）ポール・ヴァレリー書簡の文化史的研究

研究課題名（英文）Studies on the letters conserved by Paul VALERY from cultural and historical viewpoints

研究代表者
今井　勉（IMAI, Tsutomu）

東北大学・文学研究科・教授

研究者番号：４０２９２１８０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,500,000円

研究成果の概要（和文）：フランス第三共和政期の代表的詩人思想家ポール･ヴァレリー（1871-1945）の書簡執筆を文学行為のひとつと捉え、発信と受信の両面で再検討した。具体的には、フランス国立図書館所蔵の受信書簡集『総合書簡』全42巻をはじめとする関連資料を、現存する発信書簡と可能な限り照合しつつ、分析した。友人・知人・愛人ら多様な人物との往復書簡を詳細にたどることで、時代と濃密に関わった文人ヴァレリーの姿を文化史的な観点から明瞭に浮き彫りにすることができた。

研究成果の概要（英文）：We completed a total observation of all the letters that Paul VALERY received from his friends or other peoples in his life, letters conserved in the Department of Occidental Manuscripts of National Library of France. We analyzed these documents and clarified the cultural and historical aspects of the literary activities of Paul VALERY.

研究分野：仏文学・仏語圏文学

キーワード：仏文学　ヴァレリー　生成研究

１．研究開始当初の背景

19 世紀以降、とりわけロマン主義以降の作家にとって、書簡は、内面を語る場、文学的な訓練や作品生成の予備段階の場として特権的な位置を占めている。ヴァレリーもまた、アンドレ・ジッドやピエール・ルイスといった友人、あるいはカトリーヌ・ポッジやジャン・ヴォワリエといった愛人への手紙のなかで、自己の内面を吐露し、文学論や作品制作の苦労を率直に語っている。一方、ヴァレリーが相手から受け取った手紙もまた、言わば合わせ鏡として、作家ヴァレリーの実像を知るうえで劣らず重要な意義を担っている。こうした往復書簡は、文学研究の副次的な資料というよりは、それ自体がひとつの文学であるという判断から、この数年来、ヴァレリーとその知友や愛人との往復書簡集が活発に編纂・上梓されている。ジッド＝ルイス＝ヴァレリー『三声書簡』（2004 年）、ポッジ＝ヴァレリー恋愛書簡『炎と灰』（2006 年）、新版ジッド＝ヴァレリー『往復書簡』（2009 年）――ガリマール社から立て続けに刊行されたこれらの往復書簡集は、文人ヴァレリーの等身大の姿を活き活きと伝える貴重な証言として、ヴァレリー研究の新たな展開に大きな寄与をもたらしている。

近年、時代の文学・芸術・思想・科学・社会・風俗との有機的な連関のなかで、また、実際の様々な人間模様のなかで作家像を総合的に捉えようとする文化史的視野に立った作家研究が進みつつある。こうした文化史的研究において効果的な文献となるのが、多様な人物との交流を綴った書簡である。書簡を広範に渉猟し、その成果を如何なく発揮した好例が、ヴァレリー伝の決定版という評価を得ているミシェル・ジャルティの評伝『ポール・ヴァレリー』（2008 年）であろう。ファイヤール社から刊行されたこの大著は、ヴァレリーという一作家の人生に徹底して寄り添うことによって、結果的に、第三共和政の文化史を活写した見事なルポルタージュとなっている。

こうした最近の研究動向を踏まえ、ヴァレリーが多様な人物と交わした書簡について、未刊行の受信書簡を含めて分析・紹介を行うことは、ヴァレリー作品の読みを深めることに寄与するばかりでなく、ヴァレリー像を文化史のなかで再構築するための有効な基礎作業ともなるはずである。これまで一貫して生成論的手法によるヴァレリー作品の読み直しを行ってきた申請者は、平成 23～25 年度の科学研究費補助金研究において、ヴァレリーの芸術論テクストの生成を文化史的な観点から明らかにする試みに着手した。平成 24 年に筑摩書房から刊行された『ヴァレリー集成Ｖ〈芸術〉の肖像』における翻訳・解説の試みはその成果のひとつである。生成論的研究の延長線上で、書簡を主な研究対象に据えて、ヴァレリーの作家活動をあとづけようとする今回の試みは、文化史的な研究の手法をさらに強く意識して企図されるものである。

２．研究の目的

ヴァレリーは筆まめである。その生涯に書いた手紙（発信書簡）は優に数万通に及ぶ。受け取った手紙（受信書簡）もおそらく同じ規模に達するだろう。失われた手紙も多いとはいえ、限られた時間で残された全体に目を通すことはもとより不可能である。本研究では、これまでに刊行された各種書簡集のほか、特に、その多くが未刊行となっているフランス国立図書館所蔵の受信書簡集『総合書簡』全 42 巻に対象を絞り込みたい。ヴァレリーが書いた発信書簡については、宛名人の家族が保管している場合等を除いて、その多くは散逸しているものの、ジッドやルイスのように著名な作家、またポッジやヴォワリエのような一部の愛人が相手の場合には特に、まとまったかたちで各種アーカイヴに収蔵されているケースも多い。既刊の往復書簡集はこれらの発信書簡と受信書簡とを照合して編纂したものである。本研究では、受信書簡集『総合書簡』との関連で、発信書簡の存在が確認できる場合、可能な限り、収録文献や所蔵アーカイヴの調査を行い、「往復」の内実を再現する。

全般に、手紙や手稿といった一次資料を扱う作業が中心となるため、パリのフランス国立図書館西洋手稿部（受信書簡を含む手稿の大半を所蔵）とジャック・ドゥーセ文学図書館（ジッド、ルイスらとの往復書簡、ヴァレリー作品の初出紙誌等を所蔵）への出張調査が本研究活動の中核をなす。主な調査対象は、およそ 5 千通にのぼる受信書簡を収めるフランス国立図書館所蔵の『総合書簡』全 42 巻（手稿分類番号 NAF19163-19204）であり、可能な限りの分析を行い、研究の基盤資料を構築する。

研究期間内での実現可能性を考慮して、受信書簡集『総合書簡』のなかでも特に独立した巻を与えられ、しかも、対応するヴァレリーの発信書簡の多くが現存している点で、「往復」の内実を追跡しやすい人物、すなわち、ピエール・ルイス（NAF19183-19186）、およびアンドレ・ブルトン（NAF19167）からの受信書簡を中心に手紙テクストの活字転写と詳細な分析を遂行することを具体的な達成目標とする。手紙執筆当時の作品制作過程とヴァレリーを取り巻く人間模様に常に注意を払いながら、ヴァレリー書簡の意義を文化史的な視座のもとに浮き彫りにすることが、研究期間内に達成すべき総合的な最終目標である。

３．研究の方法

はじめに、日本在住の者が書簡を含むヴァレリー手稿の研究を行う上での特殊事情に触れておく。ヴァレリーの長女アガートの没後、フランス国立図書館所蔵手稿原本の閲覧

許可および複写依頼に必要な著作権者の署名はアガートの娘のマルチーヌ・ボワヴァン＝シャンポーに一元化されたものの、現在のところ、手稿マイクロフィルムの一括コピーサービスは、日本ヴァレリー研究センターによる依頼も含めて制限されている。つまり、ヴァレリーの手稿研究を行うには、所蔵アーカイヴに実地に赴くしか方法がないのである。こうした事情から、ヴァレリー関連の書簡テクストを対象とする本研究においても、それらのコーパスが保存されているフランス国立図書館等への出張調査が研究活動の大前提にならざるをえないという点は強調しておきたい。こうしてフランスでの実地資料調査に当たる傍ら、機会を捉えて、識者を仙台に招聘し、文学書簡の文化史的な意義をめぐるシンポジウムや講演会の開催といったイベントを企画する。以上から本事業の内容は、①資料調査、②イベント企画という二点に集約される。

①資料調査については、長期休業期等を利用した外国出張を効率的に設定する。主な研究対象コーパスとなる『総合書簡』全 42 巻（手稿分類番号 NAF19163-19204）については、フランス国立図書館に赴き、まずマイクロフィルムで、およそ 5 千通にのぼるその全体に目を通す。本研究遂行のための予備調査で、資料体は差出人のアルファベット順に整理され、各巻平均 120 通程の分量、書簡は数行の葉書から数頁の封書まで様々であることがわかっている。滞在時間は限られるため、基本的には、既刊の各種往復書簡集等に未収録のもので、未だ十分な検討がなされていないもの、なおかつ、文学史上あるいは文化史上、特に重要な資料と考えられるものを重点的に調査する。具体的な重点調査項目は以下の二点である。第一に、親友ピエール・ルイスからの書簡 4 巻分（NAF19183-19186）である。ルイスからの書簡は各種往復書簡集等に収録されているケースが多いが、未刊行のものも少なくない。ヴァレリーとルイスの往復書簡の一部が収められているジャック・ドゥーセ文学図書館での調査も同時に進めながら、ヴァレリーの詩論に大きな影響を与えたルイスとの関わりを再検討する。第二に、アンドレ・ブルトンからの書簡 1 巻分（NAF19167）である。ブルトンはヴァレリーに師事したのち、やがて決裂し、シュルレアリスムの首領となる人物であり、文化史における前衛と後衛の問題を考える際に、二人のやりとりは貴重なヒントとなる。重点的に扱うこれらの書簡以外にも、『総合書簡』には、ヴァレリーの生涯の各局面で重要な役割を果たす人物が多数登場する。疑問点については折に触れて、評伝『ポール・ヴァレリー』の著者ミシェル・ジャルティ氏に教示を願う。氏との連絡体制は密であり、情報提供を依頼する上での支障はない。

②イベント企画については、ゲストと交渉して、研究打合せの機会を設け、文学書簡一般を含めた射程の広いテーマを設定し、東北大学大学院文学研究科や日本フランス語フランス文学会東北支部会等主催の講演会やシンポジウムのかたちでイベントを開催する。他研究機関の研究者が行う同趣旨の企画があれば積極的に連携する。

４．研究成果

①資料調査については、職場のサバティカルイヤーに当たった平成 27 年度に本研究事業に関わる外国出張を集中実施し、およそ 4 か月かけてほぼ網羅的な資料調査を行うことができた。その過程で、特にピエール・ルイスとの 1916 年を中心とした往復書簡、また、アンドレ・ブルトンとの初期の往復書簡の実態をほぼ 80%まで明らかにすることができた。ヴァレリーの代表作である長編詩『若きパルク』（1917 年発表）の制作過程におけるルイスとの詩学論議の影響はこれまで様々なかたちで指摘されてきたが、往復書簡を読み解くなかで、その細部にわたる議論が明瞭になってきた点は大きな収穫であり、今後の精密な論文化に向けて、大きな一歩となったことを強調しておきたい。また、ブルトンとの往復書簡の実態については、ブルトン側の遺族が所蔵しているヴァレリーの手紙の多くが参照困難となっている点は残念であるが、それでも、欠如部分が明確になった点はそれなりの進展であると考えることもできるだろう。パリ滞在中はこれらの資料調査の傍ら、パリ第四大学のミシェル・ジャルティ教授など、ヴァレリー研究の第一線の研究者と折に触れて研究打ち合わせを行うことができた。特に、ジャルティ氏が中心となって始まった、ヴァレリーの生涯にわたる思考ノート「カイエ」全 260 数冊を完全活字化しようとする壮大な計画「ソルボンヌ・プロジェクト」への参加を促され、実質的な作業が開始したことは、本事業による副次的な成果として特筆すべきものがあると言えるだろう。そのほか、ヴァレリーをめぐる国際研究集会も聴講することができ、充実した研究滞在を実施できた点も指摘しておきたい。こうした外国出張における資料調査や研究打ち合わせの成果の一部を平成 27 年度の日本フランス語フランス文学会東北支部大会（於石巻専修大学）の特別シンポジウム「世紀末の文芸誌と作家たち」での研究発表に活かすことができた。

②イベント企画については、まず平成 26 年度にパリ第十大学のウィリアム・マルクス教授によるヴァレリー詩のセミナー（「アポロンの巫女」読解）を企画開催し、『フランス文学研究』誌上にて報告を行うことができた。また、平成 28 年度には、日本フランス語フランス文学会秋季大会（於東北大学）にあわせてミシェル・ジャルティ氏を招聘し、特別講演（「ポール・ヴァレリーとその時代」）を企画開催すると同時に、東京大学と京都大学でも講演会（「新版ポール・ヴァレリー作

品集の編集をめぐって」）を設定し、最新の知見を得る機会を設けることができた。特に、後者については、ジャルティ氏の編集になる新版ヴァレリー作品集の具体的な側面について知識を得ることができた点で、日本のヴァレリー研究にとって大きな貢献があったものと評価されるだろう。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計０件）

〔学会発表〕（計１件）
　今井　勉、「ヴァレリーと世紀末文芸誌――『ラ・コンク』を中心に――」，日本フランス語フランス文学会東北支部大会シンポジウム「世紀末の文芸誌と作家たち」（於石巻専修大学），2015 年 11 月 7 日

〔図書〕（計０件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
今井　勉（IMAI，Tsutomu）
東北大学・大学院文学研究科・教授
　研究者番号：40292180

(2)研究分担者
（　　）

　研究者番号：

(3)連携研究者
（　　）

　研究者番号：

(4)研究協力者
（　　）